

## 月岡芳年の伝記に関する諸問題

古川真弓

### はじめに

月岡芳年（一八三九～九二）は、幕末から明治期にかけて活躍した画家である。活躍期が時代の転換期にあたっていたことから、従来正當に評価される機会があたりなされていなかった。また、彼を死に至らしめた不幸な精神の病や、幕末期に刊行された一連の「血みどろ絵」などが必要以上に強調され、とかくかたよった評価がなされてきた。

芳年の伝記については、昭和五年に発表された「芳年伝備考」<sup>(1)</sup>以来まとまった形の研究は存在せず、出典が不明確なまま踏襲されてきた事項が多く存在する。右に記したかたよった評価は、伝記資料の検討の不備にもその原因を求めることができよう。そこで本稿では、従来の伝記記述の不備を改めるべく菩提寺にのこる過去帳や墓石など一次資料を再び検討し、問題とされてきた点を項目をたてて記すこととする。次項に芳年の略伝と伝記の問題点を、そして巻末に【資料1】として年譜を挙げたので、次項以下の記述について参照されたい。

## 一、月岡芳年の略伝と伝記の問題点

月岡芳年は天保十年（一八三九）三月十七日、江戸新橋南大坂町で生まれた。父は幕府の御家人であった吉岡兵部と推定されているが諸説ある。実母の名は特定できない。本名は米次郎。後に父の従兄であると思われる商人、京屋織三郎のもとに養子に入り、またその後大叔父にあたると思われる画家月岡雪斎（未詳、一八三九）の姓を継いで月岡と名乗ったと考えられている。嘉永二年あるいは同三年（一八四九・五〇）に、浮世絵師歌川国芳（一七九七～一八六一）に入門する。画名は芳年。号は一魁齋、玉櫻。錦絵の処女作は嘉永六年（一八五三）の「文治元年平家の一門亡海中落入図」と題する大判三枚続の作品であるが、作品調査の結果によれば本格的な作品制作の開始は万延元年（一八六〇）と見られる。以降幕末の浮世絵界に精力的な作画活動を見せ、浮世絵師の人気番付では慶応元年（一八六五）には第十位、明治元年（一八六八）には第四位に位置している。その間慶応元年には画姓月岡が初めて見られ、また同年には実子（死亡）の存在が確認できる。

明治に入ってまもなく明治三、四年頃に極端な制作量の減少があり、当時失意の状況にあったことを窺わせるが、そのため明治五年秋には神経衰弱にかかり病にふしたと伝えられる。翌六年には病も回復し、号大蘇を新たにもちいはじめる。新しい号大蘇は、大きな蘇りを自ら祈念したものであるという。これ以降芳年は主題において歴史への傾倒を、技法においては写真への志向を見せながら師の画風からの脱皮をはかり、同時代において「芳年風」と称されたみずからの様式を確立する。明治十八年には人気番付で首位を占めるにいたっ

ている。しかし、明治二十四年から持病の病が再発し、脳病院に入院した後、明治二十五年（一八九二）六月九日仮寓であった東京本所藤代町で没した。享年五十三歳。法名は大蘇院积芳年居士。東大久保（現新宿六丁目）専福寺に葬られた。

芳年の伝記の問題点としては、生家と家系、父親の特定、月岡雪斎との関係、結婚と実子の有無、精神病の問題などが挙げられる。本稿では、家系と父親の特定、病と家庭、そして上方の画家月岡雲斎との関係を資料から検討することとする。

## 二、芳年の家系と父親の特定

芳年の生家の姓は吉岡であるとされており、その根拠は菩提寺である専福寺にのこる芳年の墓が吉岡家の墓所にあることである。吉岡家の墓所には月岡家の墓、吉岡家の墓石が二つ、芳年個人の墓石、それに芳年の養子月岡耕漁夫妻の墓石の計五基が現存しており、ここから芳年の一族が尾張屋、京屋という商家と吉岡兵部という幕臣であったことが確認できる。この項では、主に菩提寺にのこる過去帳と墓石の記載を参照しながら芳年の家系について記すこととする。過去帳と墓石の記載は【資料2】として提示したので参照されたい。

芳年の生年月日は天保十年（一八三九）三月十七日、没年月日は明治二十五年（一八九二）六月九日、これは過去帳の記載から確認できる。<sup>6)</sup>

次に芳年の生家と養家、そして父親についてであるが、実父については従来諸説があり、はっきりしない。

現在定説となっている「幕府の御家人吉岡兵部」説と従来の諸説を資料から検証してみよう。芳年の父親とされる人物は以下の四人である。ここでは便宜上、aとdと記号をつけて記すこととする。（ ）内はその説の根拠である。

- a. 吉岡兵部（『月岡芳年翁碑』<sup>(6)</sup>碑文）【資料3】
- b. 吉岡金三郎（『大日本人名辞書』<sup>(7)</sup>）
- c. 月岡為三郎（『本朝浮世畫人傳』<sup>(8)</sup>）【資料4】
- d. 吉岡織三郎（戸籍）<sup>(9)</sup> 【資料5】

右に挙げた人物を過去帳と墓石の記述から検討すると、a. 吉岡兵部は新橋南大坂町に住んでいた人物で、おそらくは幕臣とおもわれ、b. 吉岡金三郎は該当人物が存在しない。c. 月岡為三郎は新橋芝口一丁目に住む商人。京屋重五郎の弟で画名を雪齋という画家、d. 吉岡織三郎はやはり芝新橋に住む、屋号を京屋という商人である。

過去帳に該当人物がないb. 吉岡金三郎について山中古洞はa. 吉岡兵部の前名としており、その記述を信頼するならば、まず父親とされる人物を三人に限定できる。また芳年が嘉永六年（一八五三）頃に描いたとされる版本の挿絵に「吉岡芳年」の署名が見られることが既に指摘されており、それが幕末期において既に芳年の本姓が吉岡であった根拠とみなされるので、a. 吉岡兵部（金三郎）を実父と断定して差し支えなからう。

芳年の父親とされる人物が複数存在するのは、芳年が養子に入っていることなど、やや複雑な家庭の事情があるからである。【資料2】を再び参照されたい。月岡家の墓に智明童女という法名の女子が葬られている。

過去帳の記載によれば「慶應元年乙丑七月十二日(京橋桶町二丁目京屋米次郎女子 二才)」とある。米次郎は芳年の本名であり、ここから、芳年が慶応元年の時点で商家京屋の養子であったことが新たに判明した。そして同時にこの時期以前に一度妻帯していたこと、実子は存在しなかったとされてきた芳年に、死亡してはいものの実子があったということが確認できた。またこの年に刊行した錦絵作品の署名に初めて画姓月岡が使用されていること、<sup>(12)</sup>死亡した女子が月岡家の墓に葬られていることから月岡の姓を継いでいたということも確認できよう。芳年が継いだ月岡家は、彼が生まれた年に死亡した月岡雪斎(為三郎)を最後に断絶している。つまり芳年は京屋の養子でありながら姓のみ月岡を継いだということになるだろう。このように、芳年が養子に入ったこと、そしてその時期は少なくとも慶応元年以前であることは資料から確認できるのであるが、<sup>(13)</sup>幕臣の子として生まれながら商家に養子に入った理由としては実父との折り合いが悪かったという家庭の事情であると文献は記す。<sup>(14)</sup>

なお養家の家業は薬屋であるという説、<sup>(15)</sup>町医者であったという説<sup>(16)</sup>があるが現在のところ明らかでない。

今回の検証結果と「芳年伝備考」の記述を基に【資料6】として芳年の家系図を作成した。家系の詳細については参照されたい。

### 三、病と家庭

芳年は生涯一度に渡って精神の病を病んでおり、それが彼へのかたよった評価の根拠とされてきたものであ

る。芳年に関する文献は同時期の画家にくらべて決して少なくない。むしろ昭和四十年代後半からは注目される画家となり、彼と同じ時代を活躍期とする画家の中では多い方であると言える。けれどもそれらの文献の多くは精神病がもたらす作品への影響であるとか、芳年の人格自体に与えた精神病の影響について触れたものである。しかし創造の世界に生きる人間の芸術的狂気と一般の狂気を混同してはならないし、また生活環境によって人格が規定されるように、時代背景を抜きにしての作品論は無意味である。とりわけ時代の美意識や志向を敏感に反映させることによって命脈を保ってきた浮世絵版画の作品については、時代背景の理解は必須であると言える。

芳年の生きた時代が未曾有の変動期・転換期であったことを思えば、幕末期の彼の作品の中に見られる残虐性、怪奇な様相もまた世相を反映したものであることが理解できよう。

芳年の病に関する資料は乏しい。彼の没後連載されたやまと新聞に載る略伝【資料7】と先にも挙げた「芳年伝備考」、それに彼の過去帳【資料2】に、死因としての病名を載せるのみである。病名については、一度目は明治五年の秋に神経衰弱<sup>(18)</sup>、二度めは明治二十四年頃から脳充血、あるいは鬱憂狂とされている<sup>(19)</sup>。芳年に関する近年の記述では、脳充血や鬱憂狂などといった病名が現在の医学に存在しないことから、さまざまな病名をあてはめているが、彼が実際に入院した巢鴨病院（現・松沢病院）や小松川脳病院（逆井病院とも伝える）から病状に関する資料が発見されたわけではなく想像にすぎない。現段階において結論を出せる問題ではなく、新資料の発見を待ちたい。<sup>(20)</sup>

精神病に起因するものとして彼の実子の有無について触れる文献が存在する為、ここで芳年の結婚と家庭に

ついで述べる。資料によると、芳年は二度妻帯している。前項でも記したが、吉岡家の過去帳の記載【資料2】から、芳年が慶応元年の時点で既に妻帯しており、実子を亡くしていることがわかる。この時の妻の存在は過去帳からは発見できないので、おそらくは離縁したものと思われ、出自については「清元の師匠の娘」と文獻が伝えるのみであり名はわからない。二度目はおそらく明治十一年（一八七八）頃であると思われ、相手の名を坂巻泰と言った。<sup>(21)</sup>芳年は慶応元年に実子を亡くして以来子供に恵まれず、現在芳年の子孫として残るのは泰夫人の連れ子であるきん氏と耕漁氏の家系のみである。<sup>(22)</sup>芳年の菩提寺に残る過去帳の記載が芳年を最後にとぎれており、戸籍や婚姻届などの資料も震災や戦災によって焼失し、家庭については不明な点を多く残しているが、更に資料の発掘、調査を進めねばならないだろう。

#### 四、月岡雪齋との関係

芳年の養女である小林きん氏の「亡父芳年の思ひ出」<sup>(23)</sup>には

祖父に当る画家月岡雪齋の許に行つて絵の稽古をして居まして、後ち其の祖父の養子となつたと聞いて居ます。

という記述が見られる。また【資料2】にも「月岡為三郎 画名雪齋」との記載があり、前項での検討とそれ

を基に作成した【資料6】では、雪斎は芳年の祖父の兄（あるいは弟）でありその姓を継いだと結論づけた。

つまり芳年の一族の中で、尾張屋という商家の出身で月岡雪斎と名乗る画家が存在することになる。過去帳の記載によれば月岡雪斎は法名が了教信士、没年月日が芳年の生年と同じ天保十年二月一日で、京屋重五郎の弟にあたり、本名は月岡為三郎、画名を雪斎と言ったという。しかし吉岡家及び尾張屋、京屋の一族にはこの雪斎以外月岡姓を名乗るものはいない。すると雪斎は他家へ養子に行き、月岡を名乗り、没した後、生家の墓所に葬られたとするのが自然であろう。一方上方には同名の月岡雪斎という画家が存在する。この雪斎はやはり上方の画家である月岡雪鼎<sup>(26)</sup>の長男であって、大坂の画壇で活躍したとされている。

ではこの二人の雪斎は同一人物なのであるか。あるいは同名の画家が上方と江戸に存在したのであるか。

従来の方年研究において、伝記上最も大きな問題とされてきたこの点については、未だ結論は出ていない。

瀬木慎一氏「芳年の人間と芸術<sup>(27)</sup>」では、芳年の家系についての解明の後、

右に見る限りでは、雪斎は通説に反して、雪鼎の実子ではなく、京屋から行つた養子であるか、それだければ、逆に、かれの実子が京屋為三郎となったということになるが、この辺は、いまだに判然としない。

としており、上方の月岡雪斎との同人説への傾きを見せているが、一方吉田漱氏の「芳年の時代性と反時代性<sup>(28)</sup>」は、



月岡雪斎の画業についてはほとんど資料がないが、本名は月岡為三郎、武州南豊島郡大久保の生まれ。上方の月岡雪斎とは別人。

と、根拠は示されないもののはっきりと同人説を否定している。

さて上方の月岡雪斎について松平進氏は、

堀江に住まいしたが、のちに江戸に下り天保まで活躍した。年齢は未詳だが天保十年に没したことは確かである。その名跡は明治の異才月岡芳年によって継がれたことは周知の通りである。

とし、芳年との関係については触れず「名跡を継いだ」としている。<sup>(29)</sup>

また『近世大坂画壇』に収載される画人伝は、月岡雪斎について以下のように記している。<sup>(30)</sup>

月岡雪斎 一 天保一〇（一八三九）

名は秀栄。字は大素。俗称為三郎。月岡雪鼎の長子といわれるが、『浪速人傑談』では義子とする。（中略）天保十年二月一日に没して東大久保専福寺に葬られたとする説がある。（後略）

更に『日本畫家辞典』<sup>(31)</sup>による月岡雪斎の記述は以下の通りである。

諱は秀栄、字は大溪といふ、江州の人、雪鼎の長男にして、父の畫風を学び、法橋に叙せらる、天保十年二月朔日歿す、江戸下谷龍泉寺に葬る。

また『浮世絵師伝』<sup>(32)</sup>も同様に没年月日のみを天保十年二月一日と特定し、大坂から江戸に下ったとする。

大阪に残る上方の月岡雪齋に関する記録は、安永六年（一七七七）刊の『難波丸綱目』に「法橋月岡雪鼎男月岡雪齋」とあるのが最も早い記録であり、以降、寛政二年（一七九〇）刊『浪華郷友録』、文政六年（一八二三）春刊『續浪華郷友録』、同じく文政六年十二月刊『浪華金欄集』に見出す事が出来る。右に挙げた記録と、月岡雪鼎の生没年が明記された文化十五年（一八一八）刊『本朝古今新增書畫便覧』、雪齋を雪鼎の義子とする『浪速人傑談』を【資料8】としてまとめる。雪齋に関する記録では、寛政二年の『浪華郷友録』が最も詳しく、少なくとも寛政二年以前に法橋に叙せられていた事、名は秀栄、号は大素、当時の居住地を境町筋車町と伝えるが、以降の記録は極めて簡略であり、堀江という居住地のみを伝えているにすぎず、記録の上では、江戸に下ったという件も没年も確認出来ない。

しかしながら、先に挙げた松平氏の記述や『日本畫家辞典』などでは、雪齋が江戸に下ったこと、没年は天保十年（一八三九）であることを明言しており、また墓所が江戸に存在したことから<sup>(33)</sup>も一応真実としてよからう。雪齋の生年を特定する記録はないが、実父とされる月岡雪鼎については【資料8】に「天明六没七十七」とあるのでおのずから明らかになる。年齢のみで計算すると雪鼎と雪齋を実の親子とするにはあまりにも年齢差が大きい、年老いての子供である可能性もあり、否定はできない。

一方、京屋重五郎の弟雪斎も、生年は明らかではない。兄弟と推定される吉岡兵部の生年が宝暦十年（一七六〇）であり、また父である尾張屋重蔵の没年が天明八年（一七八八）であることから、生年は宝暦十年頃から天明八年以前と推定できるものの、兄重五郎の生年がわからないためにその範囲をせばめることができず、推測の域を出ない。

しかし、以下の点から月岡雪斎同人説の可能性を指摘することができるかと思われる。まず第一点は、芳年の一族に雪斎以前に月岡姓を名乗ったものがないこと、第二に記述を照合すると、為三郎という名前が一致すること、第三に没年月日が一致すること、第四に雪鼎と雪斎との年齢差、そして最後に墓所が江戸にあったことから確かに江戸に下ったことが立証できること、の五点である。現段階においては、いずれも傍証の域を出ず、確実な根拠として挙げられるのは名前と没年月日の一致のみである。浅学にして私は、吉田漱氏の挙げる別人の月岡雪斎の存在を未だ確認できないが、名前と没年月日の一致という右に挙げた二つの根拠は、確証とは言えないまでも同人説の高い可能性を示唆する。今後の新資料の発見、また先学の研究者諸氏の御教示を待ちたい。

## 五、結 語

本稿は、月岡芳年という画家を研究する上での基盤である伝記資料の検討を目的とした。その目的上、一切の図版資料を出さず、伝記資料とそれを基に作成した資料のみを提示した。しかしここで提示した伝記資料は

充分とは言い難く、本文でも述べている通り、多くの課題を後に残すこととなった。

美術史研究では伝記資料の収集及び検討は地味な作業であり、絵画作品の検討に比べて大きな成果をあげられうる分野ではない。しかし、一人の人間である画家が放つメッセージとしての絵画作品と、その生涯は決して無縁ではない。伝記資料から確認できる芳年の生涯もまた彼の作品に深いかわりを持っている。本稿で取り上げた月岡雪斎の問題についても、明治期に刊行された文献に大坂の画家に関する文章があり、幕末期には上方の役者<sup>(35)</sup>絵も存在する。それらは芳年の大坂（あるいは大坂画壇）との近しい関係を示唆する。芳年伝記資料の検討は、作風検討における問題意識の幅をも広げることになるのである。右に記した芳年と大坂画壇の問題、あるいは逸話の中に散見される歌舞伎俳優との関係から考えられる芝居との関連や、謡曲を主題とする作品の問題などが挙げられよう。しかし紙数の都合上、作風については稿を改めて述べることにし、このへんで本稿をとじることとする。

- (1) 山中古洞「芳年伝備考」『浮世絵志』第十五号～三十二号…昭和五年三月～六年七月)
- (2) 『歳盛記』慶応元年版、同明治元年版。国立国会図書館蔵。
- (3) 「芳年風」という言葉の、文献上の初出は関根金四郎著『本朝浮世畫人傳』(明治三十二年五月…修学堂)。この文献は鈴木重三氏が、金四郎の父関根只誠が明治十四年から十八年にかけて編纂した『浮世絵師略伝』を所拠本とする指摘しておられる(鈴木重三「芳年画業の展開―師風の投影からの脱皮と回帰」『月岡芳年展』図録…平成四年八月日本経済新聞社 収載)。したがって「芳年風」という言葉が芳年在世中から言われていたことがわかる。なお「芳年風」といわれた芳年の画風とは「恰も木を刻し、其衣服は紙を織りたるが如く、稍々奇に陥ると雖も、一種の妙所あり」(右掲『本朝浮世畫人傳』)と賞されたものである。

- (4) 『東京流行細見記』明治十八年刊。大阪府立中之島図書館蔵。
- (5) 『芳年伝備考』(1) 参照) が載せる戸籍のみは天保九年とするが、これは月岡姓を継ぐための方便であったと山中古洞は述べる。
- (6) 明治三十一年五月建立。於…向島百花園。
- (7) 明治十九年四月初版・昭和十二年三月増訂十一版・昭和五十二年増訂十一版第三刷…講談社
- (8) (3) 参照。
- (9) 山中古洞「芳年伝備考」第一稿(『浮世絵志』第十五号…昭和五年三月)  
なお芳年の戸籍の原簿は、関東大震災の為に焼失しており現存しない。
- (10) 吉岡兵部の名前は二つ見いだせるが、一人は芳年が生まれる以前に亡くなっており該当しない。また兵部を幕臣とする根拠は、該当する兵部の父と思われる同名の人物に「土御門内」とあり、しかも一族の内一人だけ法名に院号がつけられていること、名字が記されていることである。想像されるのは御家人の株を買って幕臣となったことであるが、なぜ生家の墓所に葬られたのかは疑問が残る。
- (11) 瀬木慎一「芳年の人間と芸術」(『月岡芳年の全貌展』図録…昭和五十二年七月…西武美術館)
- (12) 「和漢百物語 小野川喜三郎」(慶応元年九月…大黒屋版)に「月岡魁齋芳年」の署名が見える。
- (13) 「芳年伝備考」は聞書として、嘉永三年国芳入門時に「商家らしい小僧さんを供に連れて、玄治店を音訪<sup>おとず</sup>れた」旨を記す。これを信頼するならば、既に嘉永三年の時点には養子に入っていたと思われるが、伝記資料からは明らかでない。
- (14) 山中古洞「芳年伝備考」第一稿(9)参照)は「實父に愛妾があつて家庭を乱脈にされた為、不快に堪えず伯父の許に走つたと聞いて居ます。」と記し、  
小林きん「亡父芳年の思ひ出」(『錦絵』三十五号…大正九年六月)は「父の實母が亡くなった後で實父が妾を家に入れ、家庭が亂脈に流れて居たゝまらず」と記す。実母との間が死別であるかどうかは不明だが、吉岡家の過去帳にその存在はないため、おそらく生別であるうと思われる。
- (15) 小林きん「亡父芳年の思ひ出」(14)参照)

- (16) 本多嘯月「大蘇芳年翁」『新小説』明治四十三年五月号～六月号)
- (17) 條野採菊「大蘇芳年翁の略傳」『やまと新聞』明治二十五年六月十五日～十七日)
- (18) 神經衰弱という病名は当時流行した病名である。明治十一年（一八七八）八月新富座「舞臺明治世夜劇」で血屋敷怪談のおきくを演じた五世尾上菊五郎は、幽霊を神經衰弱の結果の幻覚だとする新演出を試みている。また三遊亭円朝の「真景累ヶ淵」は、真景と神經をかけあわせたものであるという。今に伝わる芳年の神經衰弱という病名も、菊五郎と個人的に親しい関係にあった芳年自身が自ら言い出したものなのかもしれない。
- なお蛇足だが、芳年の弟子である水野年方は明治四十一年（一九〇八）にわずか四十三歳にして没しているが、その死因は「神經過勞による心臓麻痺」（「水野年方逝く」『絵画叢誌』第二百五十二号・明治四十一年）と伝えられており因縁深い。
- (19) 「終に五年末から六年にかけて強度の神經衰弱に祟られて了つた」（「芳年伝備考」第六稿・昭和五年十月（一）参照）
- 「病名 鬱憂狂」（芳年過去帳【資料2】参照）
- 「晝道の為めに精神を瘳し腦充血の病ひに罹れり」（大蘇芳年翁の略傳 続）『やまと新聞』明治二十五年六月十六日。【資料7】参照）
- (20) 芳年の養女であった小林きん氏によれば「酒の為に腦を病み」（「亡父芳年の思ひ出」（14）参照）とあるが判然としない。
- (21) 大曲駒村「芳年と幻太夫（中）」（『浮世絵誌』第十五号・昭和五年三月）に「最初、清元の師匠の娘と云ふを貰つて一度女房にした事がある」とある。また、雅三俗四「浮世絵師逸事（八）月岡芳年の窮策」（『此花』第十三枝・明治四十四年一月）は桶町在任時代（慶応元年頃か）の逸話を載せており、中に妻の存在が記される。
- (22) 「私がまだ三つか四つの人心のない頃、母は私を連れて芳年に嫁しました」（小林きん「亡父芳年の思ひ出」（14）参照）。小林きん氏の生年については、菩提寺である常楽寺の過去帳の記載「昭和廿五年十一月廿八日 小林きん七十五才」から逆算して明治八年と特定した。過去帳の内容は常楽寺の御住職からうかがったものである。なお大曲駒村「芳年と幻太夫（中）」（21）参照）では、きん氏の生年を明治九年としている。

また吉田漱氏は、芳年の結婚について明治十七年十月二十九日という日付を指摘されるが根拠は不明である。

(23) 泰夫人については大曲駒村「芳年と幻太夫(中)」(21) 参照) がくわしい。

(24) きん氏の娘である小林清子氏と、耕漁氏の娘である稲田文字氏がおられたが、小林清子氏は平成三年七月八日に八十四歳でお亡くなりになられた。なお稲田文字氏は、画名を月岡玉澗と言ひ能画を描く画家であるが、昨年御連絡を取らせて頂いた時点では病床におられた。

(25) (14) 参照

(26) 宝永七年(天明六年(一七一〇)一七八六)。上方の画家。井上和雄『浮世絵師伝』(渡辺版画店・昭和六年)によれば、高田敬輔門人で原姓は木田。名は昌信、字は大溪、俗称・丹下、信天翁。「肉筆画及び絵本類に筆を執り、殊に春画の名手として其の名を宣伝せられたり」と記す。

(27) (11) 参照

(28) 吉田漱「芳年の時代性と反時代性」(横尾忠則編『狂悽の神々』平成元年四月・里文出版)

(29) 松平進「風俗画」(『近世大坂画壇』大阪市立美術館編・昭和五十八年十月・同朋舎出版)

(30) (29) 参照

(31) 沢田章著・昭和二年初版・昭和四十九年七月三版発行・大学堂書店

(32) (26) 参照

(33) 月岡雪斎の墓所があるとされる下谷龍泉寺には、確かに以前は墓所が存在したらしい。しかし現在は、関東大震災と戦争の被害によって、過去帳はもとより、墓石も存在していないという事である。山中古洞は月岡雪斎同人説を採っており、龍泉寺と専福寺に分骨された、あるいは当時の慣例によって土葬であったならば、そのどちらかは髪の毛を納めたのではないかと想像しているが、現在となつては判然としない。ちなみに専福寺の過去帳の記載には、月岡雪斎は「土葬」とある。これは下谷龍泉寺の御住職のお話と、「芳年伝備考」、私自身が行つた過去帳調査の結果によるものである。

(34) 「横山華山の話」(『絵画叢誌』第二十八号・明治二十二年七月)

(35) 梅崎史子氏は、安政六年(一八五九)刊行の錦絵「甌福の福」(未見)に注目され、この前後に甌福が江戸に下つ

た記録がないことから、芳年の上方行きの可能性を指摘する。(梅崎史子「芳年と芝居」『月岡芳年の全貌展』図録 (II) 参照)

## Thorough Investigation on Yoshitoshi's life

Mayumi FURUKAWA

It is well recognized that Tsukioka Yoshitoshi (1839-92) is the last master of Ukiyoe woodblock print.

He was born in Edo era and had been active in Ukiyoe until early Meiji era. His works have not been evaluated until recently. This is because his most active period coincided with the period of Japanese revolution (Meiji-ishin).

Purposes of the present essay are to re-examine Yoshitoshi's life in conjunction with his data existing in his family's temple and to draw up his detailed chronicle as well as his family tree.

I would like to draw your attention to three major points, one is in his relation to his father, second is on his mental disease, and the last is in his relation with Tsukioka Sessai ( -1839).

Though there are several ideas on who was his father, however, I came to a conclusion by investigating existing data that his father must be Yoshioka Hyobu who was one of Samurais in rank.

Next, he was adopted to one of his father's cousins who was a merchant named Kyoya Orisaburo.

Finally, he took over his grand uncle's surname, Tsukioka who was an artist named Tsukioka Sessai.

It has been suspected that he was taken ill of mental problems two times in his life, namely, nervous breakdown and melancholia. According to my through investigation, this may be due to extraordinary impression of his bloody painting "Chimidoroe", I would like to point out that he was not ill and his character and his painting



were very much influenced by the Japanese popular culture existing in nineteenth century, especially by the sense of horror and cruelties which were common among Japanese people in these days. Also, these were reflected in plays, Japanese literary fiction and woodblock prints in this era.

The last point is in his relation to Tsukioka Sessai who was believed to be the first son of Tsukioka Settei (1710-86) who lived in Osaka. According to Naniwa-Jinketsudan (1855), Sessai is a son-in-law of Settei. At this stage, I suspect that Yoshitoshi's grand uncle and Sessai must be the same person.

(学習院大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士後期課程)

〔凡 例〕

1. 註釈、資料は巻末にまとめて掲載した。
2. 註釈は文中に、「\*」と記した。
3. 資料は文中に【資料】と記した。
4. 原則として引用する文章は、発表された当時のままとしたが、誤りと思われる箇所については訂正せず(※)と記した。

〔資料1〕月岡芳年年譜

年号	西曆	歳	芳年関連事項
天保10年 己亥	1839	1	3月17日、新橋にて出生。本名：米次郎、姓吉岡。父は御家人吉岡兵部。 2月1日月岡爲三郎(画名：雪斎)没(喜福寺に葬る。過去帳) 2月1日月岡雪斎没(下谷前泉寺に葬る) *兄弟子芳幾、国芳に入門 *国芳に入門↓「秋、国芳の門に入りて、写生を旨とし出藍の誉ありき」(『浮世画人伝』)前年説有 *この年以前に本屋繪三郎に養子に入るか(『芳年伝備考』)養家の家業は粟種商(亡父芳年の想ひ出)町医(『大藤芳年翁』)説有り
嘉永2年 己酉	1849	11	4月13日葛飾北斎没 <sup>90歳</sup> *国芳に入門↓「文治元年平家・門亡海中落入る図」(錦絵処女作、大縦3・署名「一魁斎芳年」)刊行↓以降安政5年迄錦絵作品無 *「画本実相教童子教余師」(※)(版本)押絵に「吉岡芳年」署名有(『芳年の人間と芸術』)
嘉永6年 癸丑	1853	15	「江戸の花子供遊の図」(大縦3※) *「軍書講談続切一代記」押絵(※) *この頃(以前)上方に旅行するか↓安政6年「甕福の福」を上演している。これは歌舞伎役者の中村甕福を画いたものである。 甕福は上方役者で安政六年頃、またその前後に江戸に下った記録はない(『芳年と芝居』) *「桃太郎節分豆詩」(大縦3※)↓玉櫻著、一魁斎号有 *「玉櫻」号使用 *本格的画業開始
安政5年 戊午	1858	20	「鳥井又助」(大縦1・市村座「加賀見山再岩藤」取材、役者絵) *「仮寝のきぬぎ」(大縦3・美人画) *「那智山大滝元覚修行の図」(大縦3・武者絵) *「神奈川横濱の風景」(大縦3・横沢絵)↓青景部分に「門人年歴」署名有
安政6年 己未	1859	21	「国芳最晩年作」横濱本町之図」(大縦3・横沢絵) *「外国人衣服仕立の図」(大縦3・横沢絵) *3月5日歌川国芳没 85歳
万延元年 庚申	1860	22	「国芳葬儀の場で兄弟子芳幾に足蹴にされる」という逸話有(『芳年伝備考』) *役者絵を多数刊行↓正月、中村座「佐野繪我錦染」から9月中村座「岩倉宗玄徳幕琴」まで11狂言に取材、17種類(含節物)の作品刊行(『芳年と芝居』)、「芳年錦絵年表」
文久2年 壬戌	1862	24	「彦三郎の定九郎」「田之助の大星方弥」「田之助の女房おかる」(大縦1)「3月中村座『仮名手本忠臣蔵』」 *「檀十郎の立場太平次」(大縦2)「5月市村座『葛漕合仇討講談』」 *「(一)青砥橋花紅彩画」(大縦2)「3月市村座(同外題)」 *「真柴大領三轉退治」(大縦3)↓尊皇攘夷世相を写す時事報道画
文久3年 癸亥	1863	25	「真本『英雄太平記』押絵(※)」 *「巻首圖」(紙本淡彩・落款無・印章「芳年」・専福寺蔵)↓「芳年先生が朝早く度々此首を見に来たといふこと及び楯に描いたといふ噂は聞いて居りました」(松井栄吉由緒書・専福寺蔵) *「分作東海道」(大縦1・鏡出)他、東海道を主題とする錦絵刊行 ↓將軍家茂上洛に伴うもの

文久4年 元治元年 2・20 1 慶応元年 4・7 乙丑	1864 1865 27	読本『清正一代記』挿絵(※) 『遠俗西遊記』(大縦1.. 続出) *源平・太平記の時代を描く武者絵多数刊行↓幕府の長州征伐による 正月15日三代豊國没 79歳 *7月12日、2才の子女を亡くす(過去應) ↓この年以前妻帯か、 相手は清元の師匠の娘(「芳年と幻太夫 新井芳宗氏談」) *この頃甲府に赴くか(檀崎宗重「浮世絵師入甲記」) 『佐久間盛政羽柴秀吉を狙う』(肉筆・横書き) この頃か 『和漢百物語』(大縦1.. 続出: 26目録) *月岡桂屋用上限↓『和漢百物語 小野川喜三郎』、署名: 一月岡 魁彦芳年 *人氣番付は清満1位、国周8位、芳年10位。当時の居住地は中橋か 『江戸最盛記』(
慶応2年 丙寅	1866 28	『分作末広五十三次』(大縦1.. 続出) ↓將軍家茂上洛による 『京橋桶町二丁目に住む』(過去應) 『番頭三人娘』第四編挿絵(※) 『英名二十八衆句』(大縦1.. 続出: 28; 芳幾分作) 『川中島大合戦』『勝頼於天目山遂死図』(大縦3) ↓殺氣立つ世相 の中、武田家取材の作品刊行 『版元も世間も殺氣に包まれた気分で、これを賞美し歓迎した。 この頃に「武田家武者无類」の中錦を始めとして武田武士の戦 死を取り扱ったものが鮮くない。』(「芳年伝備考」) 『東海道藤原毛道中清繪草』初編挿絵(※) 『繪像水滸銘々面傳』(※) 菊池容斎『前賢故実』からの影響明白 (「一月岡芳年畫、江境菫花川編『繪像水滸銘々傳』は序文に慶應 三丁卯仲春とあつて前賢故實中より脱化した數圖ある」『芳年 伝備考』)
慶応3年 丁卯	1867 29	↓『前賢故実』は正式には明治元年刊行であるが、序文には天保丙 申(天保7年)とあり、この頃には刊行されていたと見られる 『武田家武者无類』(中縦1か.. ※ 刊行) 『東錦浮世稿談』(中縦1.. 続出) 『パリ万国博に肉筆美人画、風景画各四点を出品(パリ博資料) 『仏蘭西英吉利西三兵大調練図』『騎兵体歩兵体大調練の図』 (大縦3) ↓数少ない開化絵作品 『一魁漫画』挿絵(※)
慶応4年 明治元年 9・8 1 戊辰	1868 30	上巻『蓮花猫目鑑』挿絵(※) 『題題百撰相』(大縦1.. 続出: 65枚) (2年3月迄) 『和漢氣筋一』(中縦1.. 続出) 『誠忠義心伝』(大縦1.. 続出: 47か) 『千代田城入城図』(9月廿日東幸御入城図) (大縦3) *人氣番付は貞秀、芳虎、芳幾、芳年、国周の順位『東京歳盛記』 *弟子年景を連れて上野の戦場を裸で見に行くとの逸話有(「芳年 追憶談」) *山王町・日吉町の順に転居か(年代末詳・新井芳宗氏の話) (芳 年伝備考) 『東京府中橋邊外之図 東京府京橋之図 東京府銀座邊之図』(大 縦9) ↓新地名「東京」を冠する作品刊行 『東海道藤原毛道中清繪草』第二編挿絵(※) 『9月菊池容斎『前賢故実』全巻刊行、後版を重ねる。

明治2年 己巳	1869	31	<p>「真像劇場以呂波一對」(大統1…統出※ 国周合作、役者絵 「誠齋義士銘々画伝」(中統1…統出※) *この頃日吉町に住み、弟子芳宗その二階に仮住まいするか (「芳年伝備考」)</p> <p>「東海道腰栗毛道中滑稽譚」第三・四編挿絵(※) *制作量激減↓「東京妓楼一覽」(大統3未見)「頼貞有封数富貴 奇」(「浮城物語」)の2点のみ確認 *鎌倉小林永灌と親交を結ぶ。永灌、門人と共に大磯に遊び、帰途 品川の外柵屋で幽霊を見たとの逸話有。後に精本面を描いたとい う。(「芳年伝備考」)</p> <p>「東京料理頭別居」(大統1…統出)「校舎、年一年鷹・年灰」 弟子落款有↓弟子の存在が確認 「高橋欽道之図」(「東京名勝高輪蒸気鉄道之全圖」(大統3) ↓開化絵…鉄道開通に先駆けての刊行 *鎌倉小林永灌と共に甲府へ旅行↓「佐久間盛政羽楽秀吉を狙う」 (肉筆・複製絵)道祖神甲府御町4丁目(幕の為)を完成か 同地にて何点かの肉筆屏風絵等を遺す(横崎宗重「甲府に於ける芳 年の画業」)旅行は明治4年か)</p> <p>*小林永灌との親交破れる。(「芳年伝備考」) *明眼鏡流行で銀座の明眼鏡の看板絵を描く↓「銀座での明眼鏡の 看板揮毫者は殆総て芳年である」(「芳年伝備考」)</p> <p>「海陸軍」(大統1…統出…13…5年11月6年4月刊行) ↓年末から翌年にかけて極度の憂鬱病(神経衰弱?)となり入院 2月2日東京日々新聞創刊(主宰…条野伝平・西田伝助、落合芳幾) 4月教部省「三条の教諭」発布 「敬神愛國」冒字体又可キコト 「天地人道ヲ明カニスベキコト」 「星上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守スベキコト」 6月10日郵便報知新聞創刊(通信省後援)</p> <p>7月戯作者山々享有人(条野伝平)・仮名垣魯文戯作者代として 「三条の教諭」に対し「著作道書上げ」を提出、自薦を始める 「千葉聖剣会」(大統3…落款「應請題意芳年画」…「西五改」) ↓「魁斎(魁斎)」号下限か *10月、国芳十三回忌追善供養…向島三間稲荷に碑「二男斎歌川先生 墓表」を建碑、碑の裏に門人一同の名が載る。 「二男斎門人(中略) 現存 芳宗、芳藤、芳貞、芳兼、芳満、芳幾、芳春、芳広、 芳年(後略) 芳年社中、年晴、年鷹、年灰、年次、年秀、年豊、年明、年延 年広、年種」(国芳確文)</p> <p>↓国芳現存門人中弟子の数最も多し *11月頃から「大蘇」号使用か。「芳年伝備考」) *「名義新談」(大統1…統出「大蘇」号) 「郵便報知新聞挿絵」(大統1…統出、卓近な時事報道画多し) 「徳川治績年間記事」(大統3…統出) 「桜田門外於井伊大老襲撃」(大統6未見) ↑上掲2作、征韓論沸騰に当て込んだもの…「明治七年前後沸騰し た征韓論から、東京人に宿った一公方様の世に成る」の思想に乗 じたのは不思議ではない」(「芳年伝備考」) ↓「桜田門外於井伊大老襲撃図」は「一飛ぶ様に売れた事も云ふには 及ぶだらう」(「芳年伝備考」)</p>
明治3年 庚午	1870	32	
明治4年 辛未	1871	33	
明治5年 壬申	1872	34	
明治6年 癸酉	1873	35	
明治7年 甲戌	1874	36	

明治7年 甲戌	明治8年 乙亥	明治9年 丙子	明治10年 丁丑	明治11年 戊寅
1874	1875	1876	1877	1878
38	37	38	39	40
<p>「漸くにしてかの井伊閑老遺難の図を出版す、茲に於て画風大いに世人の眼を驚かし」(後略)。「百花園確文」</p> <p>「遊年にかけて」「徳川」をテーマとする作品多し</p> <p>「徳川十五代記略」(大統1か：続出未見)「徳川累代頭像」(大統3)↓徳川將軍関係繪巻行列</p> <p>「古今短鑑」(大統1：続出)</p> <p>「南金六町」(番地に住む)「錦絵届出住所」日吉町よりの移転時は不明</p> <p>9月3日改正出版条例第二十一条：錦絵は紙中に①出版届出年月日②原作者の住所氏名③出版元の住所氏名を明らかにする事と決められる</p> <p>「情得感極形」(大統1：続出：役者絵)</p> <p>「光明七曜星」(大統1：続出：7：役者絵)</p> <p>「明治小史年間記事」(大統3：続出)↓官女、列車、熊本神風運等時事報道画</p> <p>「菊五郎の勘介討死の場は大森芳年が武者繪を其儘のこしらへて見物を悦ばしめたり」(3月新富座「川中島東都錦絵」の項)</p> <p>「続歌舞伎年代記」(日記述有)</p> <p>2月西南戦争(9月24日西郷自刃で終結)</p> <p>「西南戦争繪制作」(西南戦争関係挿物：15種、一点物！大統2、36含！28点)</p> <p>「西南霜月花」「鹿児島戦争記」「鹿児島電報」「薩州鹿児島征討記」(大統3：続出)等多数刊行</p> <p>「見立多以盡」(大統1：続出：20か)↓「たい」の語尾挿物</p> <p>「国周」「東京無双当以長船」中「大森芳年 武者 凡を離れた筆勢」とあるところ。(略伝)</p> <p>「この頃松本福湖の來訪を受け宮内省御下命繪本を描く」(「芳年伝備考」)「風俗画」3、4点</p> <p>「1月新橋丸屋町移転脱有」(「芳年伝備考」)</p> <p>「秋、新橋丸屋町移転脱有」(「芳年伝備考」)</p> <p>「大日本名将鑑」(大統1：続出：51)↓夫照大神から徳川家光公迄古今の歴史上の人物を描く、この年以降正史歴史画題を好んで描くようになる(「売れ行きも未曾有の數と云える。(中略)油絵を學んでこの絵をなしたとも伝わっている。恐らく實際であろう)」「芳年伝備考」(※油画を学ぶか)</p> <p>「見立七曜星」(大統1：続出：7)</p> <p>「見立七曜星 燈臺の火」が嚴重注意を受ける↓これを契機として多数の官女に用まれた天皇の絵画化が政府の忌避するところとなる</p> <p>「聖上阿呈后宮の御像を石版または油絵、彫刻につくり、各營業人の店頭へ差置き候て、繪紙草紙、畫圖類と一般に売りをばさずては不都合なりしとぞ」(明治15年6月：東京日々新聞記事)</p> <p>「旨の申渡に至る」(「芳年の思想的考察」)</p> <p>「美人七曜星」(大統1：続出：7)↓「七曜星」と同じく官女を描くもの</p> <p>3月2日新富座西南戦争取材「西南雲晴朝風」(after the war)↓上演大盛況</p> <p>6月8日新富座落成式、初めて舞台に瓦斯を引き、太政大臣以下千余名を招待</p> <p>「6月子團次の左團次改名祝の引幕に元康(後の家康)を描く」(「芳年伝備考」)</p> <p>6月16日菊池容斎没 91歳</p>				

明治11年 戊寅	1878	40	<p>8月新富座瓦斯灯をつけて夜間興行をする(初の夜間の芝居興行)</p> <p>*フェノロサ来朝</p> <p>**1月御届締絵に「丸屋町五番地」住所↓再び南金六町より丸屋町五番地に移転か</p> <p>**泰夫人との結婚この頃か↓「私がまだ三つか四つの人心のない頃母は私を連れて芳年に嫁しました。」(「父芳年の思ひ出」)</p> <p>「歌舞伎新報」(大統1:統出)</p> <p>「大日本史略図絵」(大統3:統出:10) ↓歴代天皇の時代の事件等を描く</p> <p>「熊雄六歌撰」(大統1:統出:6) ↓武者と当世美人を描く</p> <p>**2月銀座宮水町(移転(宮永町)住所での2月御届締絵有) ↓この住居は旗本内藤様の御屋敷跡で同じ敷地内に泰夫人の叔母が住んでいた。「芳年伝備考」(転居は前年末といふ説有)</p> <p>「教訓善悪図解」(大ニ丁掛:統出) 戯画</p> <p>「吾妻絵姿烈女鑑」(大統1:統出) 美人画</p> <p>「新柳二十四時」(大統1:統出:24) 美人画</p> <p>「東京自慢十二ヶ月」(大統1:統出:12) 美人画</p> <p>**美人画刊行多し↓新橋柳橋の芸妓等当世美人と東京新名所の組合せや、志士の妻、妾等を描く</p> <p>**「看虚百賢怪」刊行されず↓「新形三十六怪撰」と同画題作品等関連深し(「芳年伝備考」)</p> <p>合巻式読本「霜夜鐘十字辻笠」十五編挿絵、口絵</p> <p>6月新富座二番目「霜夜鐘十字辻笠」(黙阿弥作) 評判を取る</p> <p>「冠松真土夜暴動」六編挿絵(※)</p> <p>「尾上梅幸怪談話」十五編挿絵(※)</p> <p>「櫻津妾横濱談話」上下挿絵(※)</p> <p>6月梅壽菊五郎三十五会忌追善に掛看板「面の三傑」を描く</p> <p>「芳年伝備考」(↓この時の演目は新富座「桃桜紅葉彩」)</p> <p>「東京開化狂画名所」(大ニ丁掛統出:20か) ↓開化風俗を描く</p> <p>「皇國二十四功」(大統1:統出:24) 歴史人物画</p> <p>**農商總督主催第1回絵画共進会開催</p> <p>「市原野」「風神」「肉筆」絵画共進会に出品(絵画共進会資料)</p> <p>「芳年略画」(大ニ丁掛統出) 戯画この頃か</p> <p>「新客六怪撰」(大統3:統出:6)</p> <p>9月1日「絵入自由新聞」創刊</p> <p>**門人芳宗と共に絵入自由新聞の社員となる↓「芳年のことときは、明治十五年の頃、吉田健三の「絵入自由新聞」から月給四十円を支給し、定款付の車で送り迎えをするという条件で招聘され、後には月俸百円、功勞株二十、人力車進呈を申し出され、当時の人々の目をみはらせたと伝えられている。」(「明治版画」)</p> <p>**「隆々たる盛名は終に浮世絵の泰斗と称さるるに至り、最早鼎の輕重を問うものはなかつた」(「芳年伝備考」)</p> <p>『新撰女用文章』挿絵(※)</p> <p>『伊達殿秘録』上中下挿絵(※)</p> <p>『公武問答記』挿絵(※)</p> <p>『藤原保昌月弄笛圖』(大統3:共進会出品作)「市原野」を錦絵化したもの(秋山武右衛門版) ↓この年以降秋山武右衛門「滑稽堂」などの親交始まる。武右衛門を通じて俳人桂花園桂花と知り合い、以降、三枚続作品の多くを秋山武右衛門版、桂花園桂花と知り合ひ、(「芳年伝備考」)</p> <p>「東名所梅若之古事」(大統3) (秋山武右衛門版)</p>
明治12年 己卯	1879	41	
明治13年 庚辰	1880	42	
明治14年 辛巳	1881	43	
明治15年 壬午	1882	44	
明治16年 癸未	1883	45	

明治16年 癸未	1883	45
明治17年 甲申	1884	46
明治18年 乙酉	1885	47

「芳年武者无類」(大統1..統出:33)一枚物武者絵、古今の武勇の人物を描く

「根津遊廓の女郎幻太夫と交遊この頃か」(「芳年と幻太夫」)

「全盛四季」(大統3..統出:3)

↓全盛四季 冬 根津花やしき 大松楼」に幻太夫が描かれる

4月23日新富座第二番目大切浄瑠璃「柳柳東都錦繪」角書に芳年の肉筆「市原野」についての記述有↓筆意は寧ろ芳年の市原の趣向をかき清観の百面相」(「続続歌舞伎年代記」)

合巻式版本「花春時相政」三編挿絵(※)

數島文庫『噂の橋』一編挿絵(※)

勤王落民 高峰の荒鷲」二編挿絵(※)

『鳴波暫於新』一編挿絵(※)

『自由廻錦袍』一編挿絵(※)

給入自由新聞『亀上の浦島』挿絵(※)

合巻式版本『浜の松風拾遺湖水の口碑』挿絵・芳宗(※)

『五月雨日記』挿絵(※)

『為朝外伝権説弓張月』後編巻上挿絵(※)

『開明奇談写真廻仇討』二編挿絵(※)

『色濃緑笠松』上挿絵(※)

『朝霧阿蘭梨性風伝』新版二冊挿絵(※)

『唐土模倣優椰子』前編挿絵(※)

『東海道腰栗毛』増補初編、四編挿絵(※)

『天保水滸伝』(大統3..統出)

『芳年存画』(大統3)肉筆様の描線

『修築田舎派氏』(大統3)柳享種彦名記念

『給入自由新聞週社・「自由灯」に移る

『10月29日坂巻泰との婚姻届出』(「芳年の時代性と反時代性」)

合巻式版本「開明小説四季の花籠」一編挿絵(※)

『自由艶舌女文章』二編挿絵(※)

『唐土模倣優椰子』後編挿絵(※)

『花王樹草紙』挿絵(※)

『復讐美談権權の錦繪』挿絵(※)

『鳥衝沖白浪』挿絵・芳宗(※)

『錦絵情身談』挿絵(※)

『塩原多助一代記』挿絵(※)

人気書付「東京流行細見記」..1位芳年、4位国周、15位清観

『新撰東錦絵』(大統2..統出:23)

『芳年漫画』(大統2..統出:7)

↓一枚続捕物行

「教軍立志基」(大統1..分作統出:50、内芳年4点) ↓西園戰爭以後の文教政策によるものか

「祐蓮上人」(大統3)

「日蓮上人石和河にて鶴飼の迷魂を降伏したまう図」(大統3)

↓高僧の逸話を伝える作品刊行(秋山武右衛門版)

「文覚上人荒行」..「谷合戦」『奥州安達ヶ原ひとづ家之図』

『芳流岡岡雄勳』『金太郎捕鯉魚』『田舎源氏』(大統2巻)

↓翌二枚続作品見られる(22年)『翌二番』などは当時の紙面を隔からしめた好評物で、『翌二番』中の第一番に出たのは『文覚荒行』、其評判は素晴らしいものであった(「大森芳年翁」)

『奥州安達ヶ原ひとづ家之図』『田舎源氏』(大統2巻)『異禁処分』

『月百姿』(大統1..統出:10) ↓24年完結、多く謡曲に画題を取る

明治18年 乙酉	1885	47	<p>↓幾分生活が安定するようになる。自ら梅若実について観世流の謡曲を学び、またその画題を多くこれに求めて、時勢に投じようとした。「月百姿」のなかには謡曲趣味のものが甚だ多い」</p> <p>(一)「明治版画」</p> <p>『月百姿』画料は十円と伝える。「明治版画」</p> <p>『成田山に不動明王』図を奉納する。「略伝」</p> <p>『読売新聞に挿絵を描く』(芳年伝備考)</p> <p>『浅草須賀町二番地に住居新築移転』</p> <p>『輪因果遺恨傳』一編挿絵(※)</p> <p>『春色日本魂』二編挿絵(※)</p> <p>『絵本三國志小伝』挿絵(※)</p> <p>『出石奇聞普神谷』挿絵・芳宗(※)</p> <p>『10月7日やまと新聞創刊』</p> <p>『やまと新聞入社』</p> <p>『やまと新聞』連載談話挿絵</p> <p>『近世人物誌』(大統1:統出:20、やまと新聞附録) ↓幕末から明治にかけての著名な人物を描く</p> <p>演劇改良 吉野拾遺四糸鏡手桶正行討死之図(大統3)</p> <p>『奇界ヶ島俊寛僧部』粉子頭林冲陸虞侯殺図(大統2繼)</p> <p>『修羅浮世鍛鉄場主』翻訳小説挿絵(※)</p> <p>『草葉の露』翻訳小説挿絵(※)</p> <p>『露國釋史スミスリー之伝』挿絵(※)</p> <p>『演劇改良吉野拾遺』挿絵(※)</p> <p>『絵本忠義水滸伝』二冊挿絵(※)</p> <p>『2月2日やまの十職座』梅若実を御所衆に、御所五郎蔵の衣裳を「セイン」して評判を取る。『五郎蔵の衣裳富士越』の韻は大蘇芳年翁の意匠になりたる頗る美麗のものなり。『続続歌舞伎年代記』</p> <p>『菓季四迷』浮雲『第一篇刊』挿絵</p> <p>『平推茂戸隠山鬼女退治之図』『椅垂保輔車重丸術競圖』</p> <p>『羅城門波辺網鬼脱斬之図』『魯知深燭神打環五台金剛神圖』</p> <p>『松竹梅島掛額』(大統2繼)</p> <p>『市村座の11月興行、市川団十郎の衣裳を描いて評判を取る』</p> <p>12月新聞紙条例・出版条例改正</p> <p>『この時期までに二百人余の弟子がいた。』(略伝)</p> <p>『風俗三十二相』(大統1:統出:32) ↓享和、明治の美人を描く</p> <p>『浪裡白駒旗原黒旗風李達江中戦図』(大統2繼)</p> <p>『粟田口籠笛竹』挿絵(※)</p> <p>『忍々園義賊之隠家』挿絵(※)</p> <p>『娘冥婦古郷の家土産』挿絵(※)</p> <p>『冥冥累々淵』挿絵(※)</p> <p>『やまと新聞附録』時雨の笠簾』挿絵(※)</p> <p>『小助実伝松露伊達禪序詞』五十一編挿絵(※)</p> <p>『新形三十六怪撰』(大統1:統出:36) 25年6月完結</p> <p>『東下鯉魚』(大統3) ↓四糸派風花鳥画。花鳥はこの一点のみ</p> <p>『東陽堂で当時の十二大家』柴田是真・小林永濤・松本樹湖等を集めて、一双の屏風を製作、選ばれて芳年「赤壁の山水」を四糸派で描いたという逸話有。(大蘇芳年翁) この頃か</p> <p>『清玄墜澤之図』(大統2繼)</p> <p>『女人禁制きむす』(一編挿絵)</p> <p>『新住吉物語』(一編挿絵)</p>
明治19年 丙戌	1886	48	
明治20年 丁亥	1887	49	
明治21年 戊子	1888	50	
明治22年 己丑	1889	51	



明治22年 己丑	明治23年 庚寅	明治24年 辛卯	明治25年 壬辰
1889	1890	1891	1892
51	52	53	54
<p>やまと新聞附録『優歌歌島譚』挿絵(※) 『青砥藤網撲撲姿』挿絵(※) 『新編春告鳥』挿絵(※) やまと新聞附録『時雨の笠蓑』二号、四号挿絵(※) やまと新聞附録『仇娘好八丈』一号、五号挿絵(※) やまと新聞附録『復讐義見の住吉』挿絵(※) やまと新聞附録『暮鐘雪森下』一号、四号挿絵(※) 『雪月花』(大縦3)・続出(3) 役者絵、梅幸・三升・左団次 『浅茅ヶ原一ツ家 尾上菊五郎』(大縦3) 『弁慶 市川四十郎』(大縦3) ↓この頃、日本橋浜町に住居新築を決意、浅草須賀町の家相悪しとの評から、本所亀沢町に仮寓する(「大蘇芳年翁」) やまと新聞附録『阿部川原風仇浪』一号、五号挿絵(※) やまと新聞附録『裏甜天一坊』一号、四号挿絵(※) 『金太郎くらびらき』(大縦3) ↓挿絵繪筆か 5月24日果鴨病院(現・松沢病院)入院、年末小松川道井脳病院へ転院 講釈本『東台伏客伝』挿絵(※) 『浮沈梅御新話』挿絵(※) 『三遊落語 八笑人』挿絵(※) やまと新聞附録『実甜天一坊』五号挿絵(※) やまと新聞附録『菊嶺謙延命袋』二号、三号挿絵(※) 5月21日退院</p>	<p>6月9日日本所藏代町3番地に没す 6月11日娘月岡きん(後小林)の名でやまと新聞に死亡広告 東大久保228番地専福寺に埋葬 法名・大蘇院釈芳年居士 没後『新形三十六怪撰』完結 『夢の後家』挿絵(※) ↓挿絵本繪筆か</p>		

※年節は当時の慣例に倣つて数え年。

※閑遊事項に関しては、坂井洋子『風俗史年表』、加根魯マリ子『ジャーナリズム年表』

『神木維新史事典』(収載)、宮武外骨編『明治前期新聞創刊年表』(『明治文化全集』第四巻

新編篇(収載)の記述による。

※版本等の挿絵については未調査。本年譜に挙げたものはすべて梅崎史子『挿絵本目録』(『月岡芳

年』の全統展)図録(収載)に拠るものである。

※本年譜に使用した錦絵作品の形状に関する略号は以下の通り。

- (※)——未見
- 大縦1——大判錦絵縦一枚
- 大縦2——大判錦絵縦二枚続
- 大縦3——大判錦絵縦三枚続
- 大縦2続——大判錦絵縦二枚続(掛物絵)
- 大縦1掛物(総点数が確認できているものについてはうしろに点数を記す)

※尚、本年譜に引用した文献は以下の通り。

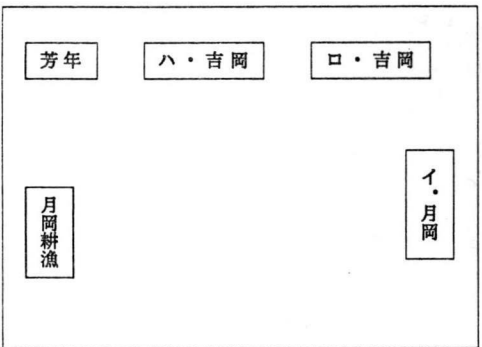
- 関根金四郎『本朝浮世画入伝』修学堂・明治32年
- 本多晴月『大蘇芳年翁』(『新小説』(収載))・明治43年
- 田村成義編『続続歌謡伎年代記』乾・鳳出版・昭和31年
- 小林きん『亡父芳年の想ひ出』(『錦絵』第35号(収載))大正9年
- 山中古洞『芳年錦絵年表』(『浮世絵誌』第11、12号(収載))昭和4年
- 山中古洞『芳年伝備考』(『浮世絵誌』第15、32号(収載))昭和5、6年
- 大曲麴村『芳年と幻太夫』(『浮世絵誌』第14、16号(収載))昭和5年
- 井上和雄『続浮世絵大家集成 一 大蘇芳年』大鳳閣出版・昭和8年
- 檜崎宗重『浮世絵師入甲記』(『浮世絵界』第1巻5号(収載))昭和11年
- 檜崎宗重『甲府に於ける芳年の画業』(『浮世絵界』第3巻9号(収載))昭和13年
- 檜崎宗重他『芳年追憶談』(『浮世絵界』第5巻4、5、7号(収載))昭和15年
- 瀬木慎一『芳年の思想的考察』(『現代思想』(収載))昭和31年
- 瀬木慎一『芳年の人間と芸術』(『月岡芳年の全統展』図録(収載))西武美術館・昭和52年
- 瀬木慎一『略伝』(同上)
- 梅崎史子『芳年と芝居』(同上)
- 高橋敏一『即』明治版画』(『浮世絵大系12』(収載))昭和49年
- 吉田漱『芳年の時代性と反時代性』(『狂悞の神々』(収載))里文出版・平成元年

〔資料2〕月岡芳年過去帳と吉岡家墓石並びに関連過去帳記述

〔月岡米次郎過去帳〕

法名 彌生寺 秋山	名 大蘇院芳年居士 死日 六月九日 葬日 六月九日	葬所 大蘇院 墓石 大蘇院	本籍地 大蘇院	現住地 大蘇院	埋葬時 六月九日	埋葬地 大蘇院	職業 農工	病名 鬱病	俗名 米次郎	生年 六月九日	死日 六月九日
法名 彌生寺 秋山	名 大蘇院芳年居士 死日 六月九日 葬日 六月九日	葬所 大蘇院 墓石 大蘇院	本籍地 大蘇院	現住地 大蘇院	埋葬時 六月九日	埋葬地 大蘇院	職業 農工	病名 鬱病	俗名 米次郎	生年 六月九日	死日 六月九日

〔吉岡家墓所配置図〕



※ここで記したイ・ロ・ハは便宜上つけた符号である。過去帳墓石記載事項の文字資料(次頁)のためのもの。

〔墓石過去帳記述〕

イ. 月岡

了教信士 天保十年己亥二月朔日(新橋芝口一丁目京屋重五郎弟 月岡為三郎 画名誓斎)  
智明童女 慶應元年乙丑七月十二日(京橋桶町二丁目京屋米次郎女子 二才)  
妙深童女 天保七年丙申八月廿一日

・左側面

一月岡雪斎

ロ. 吉岡

實順信士 文化五辰十月十四日  
妙祐信女 天保八酉五月十五日(四谷坂町尾張屋甚四郎妻) 〔※〕  
妙禮信女 嘉永四亥三月二十二日(芝新橋京屋織三郎女子)  
妙音童女 天保九亥四月四日(京屋重五郎孫女 三才)  
智順童女 天保十三寅五月三日(芝口一丁目京屋重五郎孫 男子二才)  
妙言童女 安政五年三月二十五日(新橋南大坂町吉岡兵部娘 二才)

ハ. 吉岡

・墓石正面

浄意信士 安永二年己二月四日  
教意信女 安永二年己三月九日

淨教信士 天明八年申四月十六日(青山市場 肴屋重蔵)

妙教信女 文化十年酉六月十一日(芝口一丁目京屋重五郎母 かよ 六八才 重蔵妻)

了了信士 文化六年己十一月廿三日(青山久保町尾張屋重蔵掛り人)

妙順信女 寛政二年戌四月十一日(青山尾張屋重蔵娘)

妙璋童女 寛政五年丑六月廿三日(青山尾張屋十蔵娘 他寺へ葬る)

春岸童女 天明三年卯三月二日(青山尾張屋重蔵娘 一才)

到定童女 天明六年午三月三日(青山肴屋十蔵娘 一才)

智誓信士 文化十二年亥十一月十八日(芝口一丁目 京屋重五郎)

知往童女 文化九年申十月十一日(芝口一丁目京屋重五良娘あき 四才)

妙誓信女 天保十年亥八月九日(芝口一丁目京屋重五郎妻)

・墓石裏面

智誓信士 文化十二年亥十一月十八日(芝口一丁目 京屋重五郎)

開華院釈即證信士 文政二年十一月廿七日(土御門内 吉岡兵部 行年六十)

妙誓信女 天保十年亥八月九日(芝口一丁目京屋重五郎妻)

實順信士 文久三年八月廿四日(新橋南大坂町 吉岡兵部 四九才)

知往童女 文化九年申十月十一日(芝口一丁目京屋重五良娘あき 四才)

墓石側面

文化七庚午歲四月立之

青山久保町尾張屋重蔵伴

新橋芝口巷丁目 京屋重五郎

〔※〕過去帳には天保八年五月十九日歿と記載される。

## 【資料3】『月岡芳年翁碑』碑文

「月岡芳年翁碑」

繪畫は寫生を以て本旨とすれど、寫意ならざるべからず。其意を得ざる時は精神乏しく見るに足らざるなり。和絵の寫意は、はやく巨勢家二、三代の間に新機軸を出して當時賞せられき。近き世も、賞譽せらるる諸流の達者少しとせざるが中に、芳季ぬしは、天保十年江戸新橋丸屋町に生れ、通稱米次郎と呼び、父を吉岡兵部といふ。後に故ありて、ぬし月岡氏を襲て、甫めて十一歳、一勇斎国芳の門に入り、十八歳始て錦繪の筆を揮ふ。斯道の先輩、其筆の凡そならざるを稱せ口ど、明治初歳の頃感ずる処有て、暫くその版本を謝絶す。この間困苦口といふべからざるに至るも心敢て賣さず、ただ古を師としてむかしの名匠の筆意及び寫生法を専らに臨みて怠らず。如此するもの阿三年、漸くにしてかの井伊閣老還難の圖をつくりて出版す。ここに於て畫風一変、世人の眼を驚かし、ほほ今に其名を博す。さればぬしの揮毫を得むと欲するもの多く、各新聞數種揮面の如きぬしの筆を加ふるものを以て榮したりやと。古のいはゆる寫意を得たるらむといは井がぬしの常口門生に謂へらく、余や猶壯なり。古名家の遺蹟を見るごとに、余が未熟を責む。今十數年を経過せば、世にのみ口欲すべきものあらむと。なほ坐右其粉本を供し、癖でも枕邊にこれを見しておこたらず矣に新道に精神を盡す。そも、力めたりとは劣べし。惜才天ぬしに年ヲ稱さず、明治二十五年六月九日不帰の客となる、時に年五十四。ぬし別號口口し始め玉穂といひ、又一魁斎、後成口病になるは其命旦夕に迫りしも、幸に全快す。故に改めて大蘇とて最晩年にいたり咀華亭、また子英とも號せり。世間に行はるゝ出版物枚挙に遑あらざれど、其著なるものは、百撰想、日本名将鑑、日本略史圖會、新撰東錦繪、芳年漫画、芳年略畫、芳年武者无類、三十二相、三十六怪撰、月百姿などの類なりとす。ことし、ぬしのために在世の概略をかかげ、石に勒して後代に示さむとすることかくの如し。

明治三十年十二月

正三位 公爵二條基弘 題字

小杉樞郷 撰書

(印) (印)

吉川黄雲彫刻

(注記) 句讀点等は解説の便宜上付加した。尚、解説不能の部分は口を置いた。

高野露昇君 年 小山光方 須藤宗方 中井智方 芳 野坂年晴 水藤年延  
 岡倉覺三君 永井養岳君 方 鑄木清方 西村景方 池田輝方 金木年景 武内桂舟  
 奇 刺劍師山本信司君門 大石雅方 草野樂方 本間春方 鈴木年基 枝 年昌  
 やまと新聞社 鈴木宗太郎君 人 笠原常方 藍澤福太郎 大野静方 年 尾崎年種 右田年英  
 附東京朝日新聞社 松木平吉君 田嶋口方 吉本康方 平松組太郎 新井芳宗 年人女

博文館

柳嶋寅彦君

松井年葉

西井重斎

諸春 陽 塾

綱島龜吉君

門 尾崎年華

山田敬中

條野傳平君

關口政次郎君

水野年方

中澤年章

君大根河岸三周君

細井嶺斎君

年 伊東英泰

柚木英尚

天野英雅

稲野年恒

簡井年峰

尾上菊五郎君

新 富 君

英 福手英宜

武石英郷

齋崎英朋 人

山中古洞

田口年信

連三遊亭圓朝君

富岡永洗君

門 松下英業

山川英茂

大野英起

藤田年季

笠井鳳斎

三遊社中善君

服部喜太郎君

人 笠井英昭

山本英春

都賀英寛

加藤年洲

齋藤年魚

名若菜貞雨君

玉の 井 君

渡邊英素

山田英辰

川台英忠

服部年之

坂巻年久

淑 廻 家 君

中嶋藤兵衛君

寺田英光

年琴女

浅 床 君

桂年華

滑稽堂秋山

西川宗兵衛君

年 豊

年 清

芳  
 年 年慮 小林年參  
 社 中山年次 稲垣年直 年重 福嶋年丸  
 中 年秀 山崎年信 富永年親 年正  
 故 年一 山田年貞 享嘉年保 年棟  
 門 年光 花輪年香 高橋年陸 年一  
 人 枝 年祥 年忠 年光

明治三十一年戊戌五月建之

月岡芳年の伝記問題 (古川真弓)

【資料4】『本朝浮世畫人傳』より「月岡芳年」の項へ複写

月岡芳年。

月岡芳年、通稱は米次郎、一燈齋、大藤と號す。天保十亥年三月、武州南豊島郡大久保に生る。幕府の家人、月岡爲三郎の次男なり。祖父は月岡法眼雪齋とて、雪舟の流派なり。芳年嘉永三年の秋、國芳が門に入りて、寫生を旨とし、出藍の譽ありき。菊地容齋が著すところの、前賢古實を喜びこれに北齋の畫風を折衷して、一種の骨法を出し、維新以後、描くところの人物、恰も木を刻し、其衣服は紙を織りたるが如く、稍々奇に陥ると雖も、一種の妙所ありて、これを芳年風と稱し、大に世に行はる。門人衆多にして、此の風廣く京阪地方に及ぼせり。彼の有名なる鮮齋水滸も、其初め芳年の食客となり、板下番の口授を受けしと云ふ。芳年初め桶町に住し

月岡芳年 大石

後ち新橋、根津宮川町、淺草須賀町等に轉居す。明治十五年繪入自由新聞社に聘せられ後やまに新聞に腕筆を揮ひしが、同廿五年の春に至り、癩疔病を發し、同年の六月九日遂に歿す。年五十四、東大久保村専福寺に葬す。法號は大藤院釋芳年居士。

【資料5】戸籍―「芳年伝備考」第一稿より複写

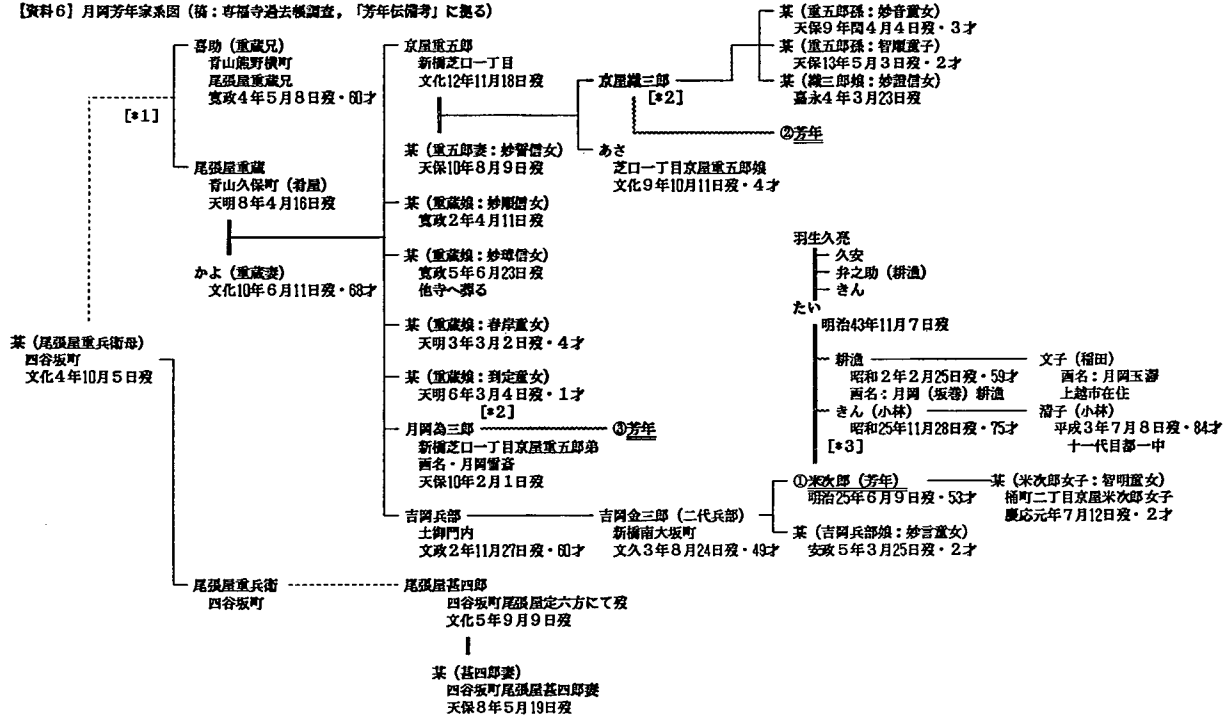
丸屋町五番屋敷内借地店吉岡繼三郎次男

米 次 郎

天保九戌年三月十七日生

明治十年三月日吉町一番屋敷より南金六町十四へ轉籍、  
同十一年九月十三日南金六町より丸屋町へ轉籍、同十六  
年四月十二日丸屋町より本郷宮永町へ轉籍。

【資料6】月岡芳年家系図（橋：専福寺過去帳調査、「芳年伝傳考」に基る）



【\*1】過去帳では特定できない関係については ---- で結んだ。芳年の親子関係は順に①②③で示した。

【\*2】養子関係にあるものは ----- で結んだ。厳密には、芳年は月岡雷音の西姓を継いだのみであり、雷音（為三郎）とは養子関係にはないと考えられる。

【\*3】養子関係。【\*2】参照。尚、弁之助（耕造）は、芳年の死後、月岡の家名、西姓を継ぐ為にその籍に入ったと考えられる。



〔資料7〕 條野採菊「大蘇芳年翁の略伝」

(『やまと新聞』明治二十五年六月十五日(十七日号) 一 複写)

○大蘇芳年翁の略傳

近年浮世捨節の泰斗と稱せられたる月岡芳年翁の天保十年(三月)南門外島郡大久保に生れ、府府の家人月岡爲三郎の次男として幼名を米太郎といふ祖父の月岡注根(徳島にて舟木派の寄江たり幼名して又を亡父仙父交野眞五郎とて之口一丁目の磯島商小繁とてれ年甫めて十二歳の時非蘇芳の門に入り米第なりと雖も然らずして其後わりと所の國方の我が門弟中後來にのみある者へ大ふ米なりと人し向ひて口外せし事ありと大と云るの二世の國方を継たる人ナリしが惜むて世を早くし遂に翁の抽由を遺書の卷に高うせり始め京橋區桶町に居住し當時同町に左の者の頭を以て聞えたる加藤岩次郎及び左官の棟梁寅吉の兩人へ翁を引立ん翁の彼方せり先師國方へ或る訓學者より烏員を交阿關院其他突き那のの新助書を借り其國を活用して書きたる物多く其ゆゑ浮世繪を一變したる翁の其國する所取て剛小も據らず門人年景は虎と呼ばて前の内弟子たりし仙生辰辰及び女房を婦人に扮せしめて其形取りを先師の圖に倣てて既文八の年岡南島島町伊勢屋某が板元となり天保水戸傳を畫し其略傳と蘇社の探綴を授りしか五十有餘歳の人物ハ採菊は其下書は工夫を練ひたる翁の文其形たる年景等よさしむりたるより其圖定表に於て此畫大ふ好評を時し芳年の芳じき名の一時期に聞えたり (以下次號)

○大蘇芳年翁の略傳(續一)

翁は幼く其を南の島に傳りて蘇芳の傳りて其の才を以て死に且世の耳目を驚かせし其の月有交を以て冠とし其翁の二十一相とて之を物と云ふ其の才を以て死に且世の耳目を驚かせし其の月有交を以て冠とし其翁の二十一相とて之を物と云ふ其の才を以て死に且世の耳目を驚かせし其の月有交を以て冠とし其翁の二十一相とて之を物と云ふ

○大森芳年翁傳(續) 其後心地狂しくなまじり  
 巴里鴨病院に入り候いて小松川の病院に轉じて復  
 發惡りわらりしものと病ひの領も重きを加へ病院  
 長も其治すべからざるものと思慮し疾疾を治す  
 て出院爲しし九たるに五月廿一日なり爾來阿婆裝  
 よ手と爲せしるも更に効無く愁しい哉本月九日五  
 十四年と一期として遂に歸らぬ旅に首途し其遺骸  
 の東大久保村二百廿八番地五福寺へ埋葬し法苑の  
 大森院釋芳年居士を唱へぬ 翁が存在中の奇蹟多  
 ありと雖も中心就て人よ異なる所を察れば其始め  
 桶町の住居を退か年長を領て甲州を起り彼の地  
 かも殊の外用ひられ其得る所も少なからざり  
 しが得る物の散する物も足らずして甲州を立立爲し  
 歸きを成る寺院の住僧が旅費を與へて歸京爲し  
 ろたるも其後重き眼病が罹り歸りて眼をひびくし  
 ろらんと言たるを以て翁の醫治し可程に効驗ありし  
 とていへども眼病無らして桶師とある事難く厚方元  
 内も如す然れども東京まで芳年がのたれ死を爲し  
 し杯を人よ笑はれんも心外なり同じ死ねなら甲州  
 の彼住僧の寺まで相果すに住僧の回向を交度む再  
 房甲州へ立立せしめ眼も速く癒えたるも折斷く知  
 らず入道して實徳へ歸り新徳の九屋町に世帯を持し  
 の妻市助と稱す市助は平光の二子也其の能く調子  
 扶けたぎを翁が生涯九屋町へ居たる時程因縁の事  
 無く留し風的首切着るべき物無くして素襦袢で居な  
 る所へ來客のありしに裸で浴に赴する事難く介役  
 を出せしと申すも幸ひ介役を充て給へり  
 翁が平生生西人等と稱して目も世の中の進歩を推れ  
 ら手前縁の自己より上手な者ならん世に居る理  
 ら出資して所を自己より上手な者ならん世に居る理  
 然れども是ららの世の中の所上で居たりありんば

〔資料 8〕月岡雪鼎・雪斎に関する記録

『本朝古今新增書畫便覧』文化十五年（一八一八）刊

雪鼎 月岡氏名昌信号信天翁赤丹  
下新入住大坂天明六没七十七

『難波丸網目』安永六年（一七七七）刊

法橋雪鼎門人 挂宗信  
法橋雪鼎門人 挂宗信

『浪華郷友録』寛政二年（一七九〇）刊

月岡秀榮 字太意  
住町多車町 法橋雪斎

『續浪華郷友録』文政六年（一八二三）春刊

雪齋 画 通称月岡雪斎  
住浪江

『浪華金襴集』文政六年十二月刊

雪齋 画 近林月岡雪斎  
住浪江

（竊紙三）中島理壽頼著『近世人名録集成』収載  
昭和五十一年二月／勉誠社 複写

『浪速人傑談』安政二年（二八五五）刊  
（大阪府立中之島図書館蔵）複写

月國寺寺

月國寺早名昌隆傳天狗年（すなわち）其下分橋手近江の人引渡成  
高田越前守學て出藍の橋行後一家分多一人おと能して津吉

殊く了くられたよ六年の後津邊を橋も舟巻也と描いて甚長  
其池當今の名寺ありけ（此名をく変種りたりしが）原下此  
名橋不其僧三十全全と成り一に思事全名成して天明六年  
西子三月不表すてし（於七十七年）字なくし門（曾角）寺子  
と代更承師よありも名寺あり一昔蘭の字を嘗て雪洞の兩  
字ありしこと近所は也、桂字候も其寺也、其國月臺は武村の敷  
筆皆月國寺早氏に池田藩ひり也、